

第八席 無理矢理に助ける

一 さて今日は機の深心の話をせんならん、一念後念の話もしたい。けれども此話は餘程力を入れて聞いて貰はねば分らぬ。あなた方の思つたこと、私の思つたこと、少し違ふことがある。

どういふことを私が云ひたいかと云ふと、すべて人が、御浄土へ参らせて貰

無理矢理に助ける

ふに間違ひないど落着いた夜明けしたのを信心と皆思ふだらう、何時命が終つても夜明けする落着く、安心する、皆やるぢやらう、何時死んでも大丈夫ど夜明けしよう、安心しよう、落着かうと氣張る、氣張つて／＼氣張る程苦しまにやならぬ。こゝをよう聞き分けねばならぬ。

夜明けするの
すが心の
だが思
ふな

参らせ
て下さ
るに間
違ひな
着いさ
落

二 今日少し此話をして見たい、あなた方も充分注意してよく聞いて貰ひたい。すべて御浄土へ参ると夜明けするのが信心、安心するのが信心と聞く、そこでお前さんは夜明けせにやいかん、安心せにやいかんと思ふ、思やア思ふ程苦しんで来る、そこで已むを得んから——仕方が無いから、参らせてお呉れるに間違ひないとして、之でマア落着くより仕様が無い。此儘参らせてお呉れるに間違ひない、斯う云はにや仕様が無い。こゝの所を氣を附けねばならぬ。それだけであなた方が暮せるならば宿善なし、無宿善。それで昨日十九二十第十八の三願轉入の相を述べて置いた、そんな所で寝て居られるやうな御同行ならば、それは第十八願から

は無宿善の機、と云ふのである。宿善の厚い人ならばそこに寝て居られる筈は無いのである。

そこで私が昨日話をした、眞宗は彌陀たのむ一念が肝要、信の一念肝要、一念といふ一の字は一つ、念はおもひ、一おもひといふ事、一おもひの信心、雜行捨て、彌陀たのむといふ一念の信心は何返もない、たつた一期に一おもひ、それで一念々々と仰しやる。蓮如様は、一念の所を話せ、外の話は言ふことは要らぬ、と仰しやつて、一念といふは何返でもない、たつた一生に一おもひで萬劫の命拾ひをする。

三 そこで眞宗でやかましく云ふのは此信願の抜ひ、信と願との抜ひ、御浄土へ向ふと阿彌陀様へ向ふとの抜ひ、一念と後念との抜ひ、之を信願抜ひと云つて一番難しい。阿彌陀さんへ向ふと成ると御浄土へ向ふと成ると、向きが大變違ふ。一念の方は御浄土向きにならぬ、阿彌陀様向き、後生助け給への一念の方は御浄

お阿彌
陀様向
浄土向
きかお
きかお

西の安心
東の安心

土へ向かぬ、阿彌陀様向き、後念は欲生相續心と云つて、命終れば何時でも御淨土へ參らせて貰ふことに間違ひない、之は後念の喜び、一念のまゝが後念なれども、一念と云ふは二度ない、此上に佛助け給へと思ふべからず、たつた一期に一度しか無い。此一度の思ひに萬劫の命拾ひをする。さうすると參らせて貰ふに間違ひない、之は阿彌陀様に向ふので無い、どこに向ふ、之は欲生相續心今日もそれ、明日もそれ、毎日思ふ念ひ、後念は多念の喜びで信心にあらす。之を信心とすることは眞宗では無い。知恩院様流の信心ぢや。心存助給口稱南無阿彌陀佛、淨土眞宗では鎮西の安心は後念の喜びには扱ふれども信心とはせぬ。今死んでも參らせてお呉れるに間違ひないと思ふ念ひは後念の喜びぢやぞ、之は一遍では無い日々思はねばならぬ念ひ、今日もそれ、明日もそれ、明後日もそれ、棺桶に足を入れる迄それで行かんならぬ。一念といふは一おもひきり、一念の方は彌陀に向ふ方、後念の方は御淨土に向ふ方、一念の方は御淨土に向はぬ、阿彌陀様向

きになる。後念は御淨土の方に向いて相續する。ア、何時でも大丈夫、此規則だけ覚えて呉れ。

そこで、私が此規則を云はなければならぬのは、安心が出来ぬ。夜明けが出来ぬと云ふのは向きが違ふ。阿彌陀様は間違はされんと夜明けはして居る。けれども愈となると安心出来ぬ、落着けない、それ當り前、彌陀に向はず、どこに向いた、お淨土向きになつて居る。

南無といふは衆生が阿彌陀佛に向ひたてまつりて後生助けたまへとたのむ機の方なりと、あらう。南無といふは衆生が御淨土へ向ふとは書いて無いぞ。その意味がはつきりせんといかぬ。一念はどこにたてる、後念はどこに立てる、一念は信樂、後念は欲生、參らせてお呉れることの間違ひなさよ、といふ喜びは後念相續の喜び、之は欲生相續心、一念と云ふは墮しはせんと云ふ親の親切に安心する。御淨土に參ることゝ違ふ、御淨土に參らせて貰ふと云ふ事の安心で無い、參らせ

墮しはせぬ
親切に
せぬ
安親
心に
よ

にやおかんと云ふ親の親切に腹の満れたおもひが一念ぢや。御淨土と違ふ。之はお前さん等聴聞の仕様が色々になつて居る。參らせにやおかんの御慈悲、助けて御呉れるの御慈悲を、參らせてお呉れる、助けて御呉れるとやつてしまふ、それが間違ひ。向きが違ふ。その所をよく分別しなければならぬ。其右と左、一念後念がゴツチャになつて居る。

四 私が此前來た時にも云つたが、餘所へ行つて御馳走に坐る、御膳が出る、もとは堅いもの程美味しかったが、此頃は齒が脱けて豆腐が一番よくなつた。餘所へ御客に行つて坐つて御膳が出た、えらい御馳走が出た、向ふの人が、顔を見ると齒が脱けて御氣の毒だ、あつちのものを食べこつちのものを食べるのは面倒だらうから、どうせ腹の中へ這入ると一緒になるのだから、飯も吸物も平も一緒にしてゴツ／＼につゝいて、サ御食いなさい、之は乞食でも食べへせん。それと同じ事ぢやぞ。お前さん等一緒にグシャ／＼に食はうとする、一念も後念もグシ

お膳の上
腹の中

ヤグシヤぢや、それでは食へぬは。一念もなければ後念もない、それで安心が出来ぬ／＼、おかしなものぢや。私は始終さう思つて居る。

萬劫の
命拾ひ

助け給へとはどういふ事、一念に彌陀たのむとはどういふ事、此儘助けてお呉れると落着いた、彌陀一佛と安心した。それを一念として居るのが多いが、それは後念である。尙々深く彌陀たのむは後念のことである。一念の助け給へはそんなことで無い。萬劫の命拾ひをすることはそれと違ふ。同行は多くそんなことばかりやつて居る——あなた方はそんな不調法な事はしないが。さうすると、こんな者を助けて御呉れるのは阿彌陀さん御一佛、それが大方助けたまふぢやらう位のことになつて、丁度人の後生をあづかつて居るやうに、面倒くさい人の事ぢや、と云ふやうになる。よくこゝは分別して貰ひたい、一念と云ふものと後念と云ふものどしつかり聞き分けて貰ひたい。一念は御淨土に向かんと置け、御淨土に安心せる方でない。又此機を出すものがある、此機出すものは安心出来ぬ。所

が落着けん、夜明けが出来ぬと此機を出す、分つたか。助けたまへは一念の時ぢやぞ。

そこで一念の時に出すものは決して居る。参れ相に思へません、助かり相に思へません、何かある、落ち相な、これより他には持ちませぬ、之を出せ。一寸出しにくからう、皆出しにく相な顔をしとる、一念ぢやぞ。

いくら聞いても、聞く時だけは御尤も、家へ歸ればあとかたもなし。我機おさへりや、参れ相にないのと墮ち相な、助かり相に無いより何にもござりませぬ。之を出せばよい、一念の時凡夫の出すものはこれだけぢや。雜行すて、彌陀たのむ一念の時、墮ちる機が御助けにあつて墮ちん機に轉じ變る、之を出す。

踏出し
が大事
愈今と踏み出したら、何かあるか、何にも後生となつたら間に合ふものはござりませぬ。たい参れ相にないのと墮ち相な、助かり相にない、後生となつたら眞つ暗がり、これより外にはござりませぬ、どうしませう、と阿彌陀様に出すの

ちやぞ。一念の時外のものを出したら駄目ぢやぞ。お前さん、餘りうまいものを出すからいかぬ。阿彌陀様の御機嫌取りに行つてはいかぬ。阿彌陀様に向ふ時は一善悪いものを出す。何故かなれば、阿彌陀様の五劫の頂上が一番悪い機を選び取つて、地獄に墮ちる機、死んだら焰の中より行き場の無い機が、彌陀の本願の選擇の相手となつた。それだから悪いものを出さずにや仕様が無い。阿彌陀様の本願の相手は何か、参れん機、助からん機が彌陀の本願の相手の機、何たる機の衆生を助け給ふぞ、罪は十悪五逆、謗法闡提のともから、たつた今命終るなり、火の坑さして行くより仕方の無い者が正客になつて居る。だから一念に何を

出す、参れ相にない、墮ち相な、サアとなつたら眞つ暗がり。どうしよう。何ば聞いても、右から聞いたら左にぬける。お前さんの十八番は、何一つ出来たぬしはござりませぬ。聞く時だけは、さうかくと、御うけは出来る、あとは何にもござりませぬ。たいあるものは方角なしの眞暗がり。そこが阿彌陀さんの心

配になる。サア行かんならん、自分で行けるなら勝手に行け。行けるとなれば此彌陀が要らんのは當り前ぢや無いか。俺の本願の正客は、後生となつたら行場持たず、未來となつたら方角なしの其機を受持つために立てた。こゝが一念の出場ぢや無いか。墮ちる機引受けると云ふ親の親切が届いたら、受持手を力にせにやなるまいぢや無いか。

阿彌陀の
目的私的
の目的

五 お前さん、氣には入らんだらうが、一寸お前さんの思つて居る事と俺の思つて居る事と違ふから、よく聴き分けんならん。昨日言つたら、私の顔をツクツク眺めて居つたが、變な事を云ふ、イヤな事を云ふ坊主ぢやと思つたと見えて皆歸つてしまつた。そこで今日あれを云はねば氣がすまぬ。

こゝで吾々の望み目的と云ふものはどこにあるかといふと、命終つて御淨土、死んで佛になる、何にも外に望みはない。此世で息災延命、病氣がよくなつて金儲けがさせて貰ひたい、それは彌陀に願はない。後生になつたら佛になりたい。御

一願一
行も努
めず

淨土に生れたい。之が吾々の望みぢや。しつかり聞けよ。そこでどうなるかといふと、其吾々の望み目的として居るのは五十二段も違ふ淨土であるから見ることも出来にや拜むことも出来にや想像も及ばぬ。そこを吾々が望んだ、一願一行も努めず、朝から晩まで欲しい憎い可愛とやり乍ら、五十二段も違ふ淨土を見たいと云ふ望みを起した、えらい望みを起したものとぢや無いか。自分乍らおかしなことぢや。地獄の品物ばかり持つて居乍ら、命終つたら佛になりたい、五十二段も違ふ望みはたゞでは起きない。幾世も、阿彌陀様の遍照の光明の御養育によつて、斯う云ふ望みが出て来た。これからさきが、昨日同行が俺を睨んだ所ぢや。阿彌陀様の目的は目的が違ふ、阿彌陀さんの目的は御淨土へ参らす目的で無い、佛にするが目的でない。吾々の目的の望みと云ふものは命終つて御淨土、死んだら淨土が目的であるが、阿彌陀様の目的は御淨土へ参らせるが目的でない。そこで睨まにやなるまい。阿彌陀様の目的と衆生の目的と同一に扱ふと大きな間

睨まに
やなる
まい

無理矢理に助ける

違ひが生ずる。

然らば其の阿彌陀様の目的は、命終つて御淨土、死んだら佛になすことが目的でなく、命終らなかつた今、性根心地の確かな只今、墮ちん事の參る事の助かる事に仕立上げようが目的。分つたか。それで一念に往生が決まる。一念に萬劫の命拾ひをする。阿彌陀様の目的は命終つて御淨土へ參らすが目的でない。衆生の目的は命終つて死んだら淨土、阿彌陀様はそれと違ふ。そなたは、たつた今から確かになりたいと思ふなら、命終つて御淨土に參る方のことはやめて、性根心地の確かなたつた今、俺が墮ちんことの參ることの助かることに決めてやるで、そこに落着け。それが平生業成と云ふ事だ。此決めて貰つた腹の据はりが一念。そこで一念に萬劫の命拾ひをする。分つたか。そこで一念と後念が違ふ。

死んだらお淨

六 一念は往生に安心するで無い、命終らなかつた今、墮ちん事の參る事に決ま

土と行くな

る事が一念、そこで後念相續は何時でも大丈夫と喜ぶ。こゝの味ひを知つて貰ひたい。

私があんた方に今度話をしたいといふのは此處だ。命終つて御淨土、それは可かんぞ、何故可きません、それは思はれもせん考へられもせん事だからやめて置け、然らばどうしよう。命終つて御淨土、死んだら佛になると云ふことが今から手握りしたいなら、そつち向かんと置け、思や思ふ程苦しむぞ。然らばどうしたら宜ろしい。性根心地の確かな只今、墮ちん事の、參る事の、助かる事に今決めてやるで、そこに落着け。我をたのめよ、我にまかせよ、と云ふ所ぢや。雜行捨て、彌陀たのむ一念の所、此一念に萬劫の命拾ひ、一念で往生が決まつてしまふ。お前さん等、墮ちん事の參る事が、決まらんものだから、なんとなう……が始まる。お前さん等善いものを出すからあかんわ。一念の時は一番悪いものを出せ。信じられません、と行け、頼まれません、を出せ。何ぼう聞いても安心出

これなら
出せ

来ません、何ぼう聴聞しても落着けませんこれなら出せるか、出せんやうな顔をして居る、淨土を出さうと思つて居る。何ぼう聞いても信じられません、何ぼう聴聞しても夜明けが出来ません。安心が出来ません。落着けません。大丈夫と云えません。今命終れば墮ちるより仕方ありません、それより他には持ちません、後生となつたら眞つ暗がりよりございませぬ。一番悪い奴を出す、これより以上悪い奴は無からう。疑ひはねばならぬ信じねばならぬ、夜明けせぬばならぬ、安心せねばならぬ、落着かねばならぬ、まるで反對ぢや。安心が出来にや夜明けが出来にや信心の御土産は要らんぞよ生れつゝいたる生地のみ、ありべがりの其儘、墮ちる實機の其儘を受取る爲めに五劫永劫の御苦勞がある。そなたの望みは命終つて御淨土、死んだら佛になる事が望みであらう、けれども、命終つた向ふの事は、そなたのやうな無明業障の恐ろしき病のものには分らんで、そつちや向くのはやめて置け。然らばどうしたら確かになれますか。命終つた向ふ

の事は、そなたが思へば思ふ程苦しむで、それはやめて置け。やめてどうしやう。性根心地の確かなたつた今、俺が受持つ、引受けて、助けてつれて行つてやるで、そこに落着け、我にまかせよ、我をたのめよ、と云ふ所ぢや。一番樂ぢや無いか、一番樂でよからう。五帖目のお文様に

無理矢
助けるが
彌陀

五劫思惟の本願といふも兆載永劫の修行といふも、たゞわれら一切衆生をわながちにたすけたまはんがための方便に、阿彌陀如來御辛勞あつて、南無阿彌陀佛といふ本願をたてましたして

とあるだらう。あながちといふのはどういふ事か、無理矢理と云ふ事ぢや。無理矢理を知つて居るか、知らんやうな顔をしとる。私の國の言葉で無理無體と云ふ。酒のすきな人に酒を飲ます、マア一杯おあがり、ハイ大きに之は御馳走様で、所が飲めんに飲ますのを無理無體に飲ますと云ふ。出来ぬ事を出かさうとするのが無理無體ぢや。それから餅の嫌ひなものに餅を食へ之れが無理無體「甘氣の

ものを食ると胸がいかん」「それでも今餘所からおはぎを貰つたからマア一つ、
「他のものならよいが、其奴だけは堪忍して呉れ」「マアそんな事をいはずに一
つだけ」それが無理無體。無理矢理とは出来ぬ事、嫌ひな事をやらせる事、あな
がちといふがそれだ。五劫思惟の本願と云ふも兆載永劫の修行と云ふも、たゞわ
れらの一切衆生を無理矢理に助けたまはんが爲の方便に、阿彌陀如来御辛勞あつ
て南無阿彌陀佛と云ふ本願を立てましたしてお前さん等は當り前に參られると思
つたら間違ひ、無理無體ぢやぞ、墮ちん機になつたものを墮とさんのなら無理矢
理ぢやないぞ。助けられるとなつたものを助けるのなら無理矢理ぢや無いぞ。參
られるとなれぬ、助かるとなれぬ、墮ち相な奴を無理矢理ぢや。そこで三代目の
覺如さんは、

男女善惡の凡夫をはたらかさぬ本形にて、本願の不思議をもてむまるべから
ざるものをむまれさせたればこそ、超世の願ともなづけ、横超の直道ともき

こへはんべれ。

參れる奴が參れると思ふな、墮ちん奴が墮ちんと思ふな、參られん奴が此儘參ら
せて貰ひ、助からん奴が此儘で助けて貰へる御本願が超世の悲願ぢやぞよ。横超
の直道ぢやぞよ。一念の時は助かるのを出すな、助かられんを出せ。墮ちる奴を
出せ、我にまかせよ我のための勅命が聞こえる。